



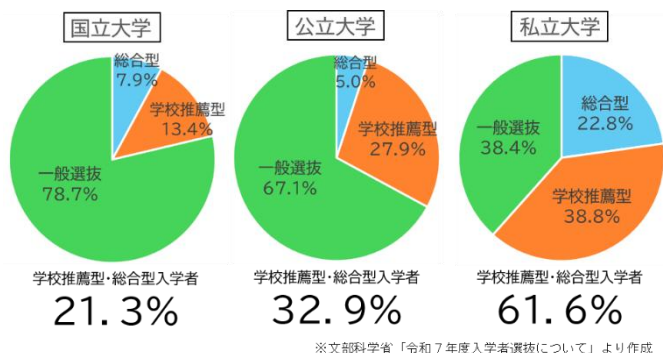
白聖

はくあ 第9号 令和8年7月16日発行



《大学入試について学ぼう②》

進路通信第8号では国公立大学入試の「一般選抜」について解説しましたが、今号では近年特に募集人員枠が拡大している「学校推薦型選抜」や「総合型選抜（AO入試）」について解説していきます。依然として国公立大学では一般選抜の募集人員枠が約8割近くを占めていますが、私立大学では既に半数以上が学校推薦型選抜や総合型選抜での入学になっています。下記の円グラフは大学別に見た令和7年度大学入学選抜実施状況です。



総合型選抜は、出願は9月以降、合格発表は11月以降と、学校推薦型選抜や一般選抜より時期が早いことが特徴です。学校推薦型選抜は、出願は11月1日以降になります。大学によって期間や選考日は様々で、事前登録が必要なケースもありますので、募集要項や大学ホームページで事前によく確認しておきましょう。

◎総合型・学校推薦型選抜の大まかなスケジュール

	9月	10月	11月	12月	1月	2月
総合型選抜	出願	選考	合格発表			
学校推薦型選抜 国公立大学【公募制】			出願	選考	合格発表	
学校推薦型選抜 私立大学【公募制】			出願	選考	合格発表	

【総合型選抜とは】

総合型選抜とは、エントリーシートなどの受験生からの提出書類のほか、面接や論文、プレゼンテーションなどを課し受験生の能力・適性や学習に対する意欲などを時間をかけて総合的に評価する入試方式です。学校長の推薦を受ける必要はありません。従来入試方式と比べ

ると、「高い学習意欲」「学びへの明確な目的意識」が選抜基準として重んじられ、選抜方法もその点が判断できるような内容となっています。出願時に受験生自身が作成して提出する書類が多いことも特徴です。2021年度入試から、学校推薦型選抜と同様に、各大学が実施する評価方法に、大学入学共通テストを含む教科・科目に係るテストや小論文、プレゼンテーションなど、学力を確認する評価方法を活用することが必須となりました。

国公立大学の総合型選抜では、出願9～10月、合格発表11～12月上旬といった入試日程が一般的です。出願条件は、「学習成績の状況」の成績基準が示されていない場合や、既卒者でも出願できる場合があるなど、学校推薦型選抜より緩やかな場合が多くみられます。ただし、大学によっては「英検などの有資格者」といった条件が加わっていることもあり注意が必要になります。

選考方法は1次：書類審査、2次：面接（プレゼンテーションも含む）・小論文といった選抜型タイプが一般的です。このほか、セミナーやスクーリングなどに出席してレポートを提出させるといったものもあります。また、基礎学力を測るために、各教科の試験や大学入学共通テストを課す大学は増加傾向にあります。

総合型選抜は一般選抜や学校推薦型選抜に比べると、大学も選抜に時間をかけており、受験生側にも労力がかかります。また、出願時に提出するものも多岐にわたる場合が多く、事前準備が他の選抜以上に多いことも特徴です。受験を考える人は早い時期からの対策が必要となりますし、一般選抜に向けた日々の勉強との両立が求められますので、忙しい生活を乗り切る覚悟も必須です。

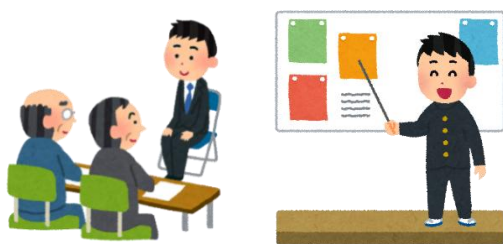
【学校推薦型選抜（公募制）とは】

学校推薦型選抜は、学校長の推薦を受けて出願する入試で、国公立大学でも全体の9割以上の大学が実施しています。近年では、東京大学や京都大学などの最難関国公立大学での学校推薦型選抜も定着してきました。ただし、国公立大学は私立大学に比べて募集人員が少なく、出願条件のうち「学習成績の状況4.3以上」など高い成績基準を設けている大学が多くあります。また、1つの

【裏面に続く】

高校からの推薦人数が制限されていることもあり、出願前に学内選考が行われるケースも少なくありません。他にも、国公立大学の場合は、大学入学共通テストを課す場合と、課さない場合の2つのタイプに大別されており、その入試日程も大きく異なっています。前者は出願が11月で合格発表が12月、後者は出願が11月で合格発表が2月といった日程が一般的です。それぞれに合わせた準備期間が必要になります。

2021年度入試からは、小論文など受験者自らの考えに基づき論を立てて記述させる評価方法のほか、プレゼンテーション、口頭試問、実技、教科・科目に係る筆記テスト、資格・検定試験の成績、大学入学共通テストなど、学力を確認する評価を実施することが必須となりました。国公立大学では共通テストを課す大学が増加傾向にあります。また「面接」「小論文」を課す大学は多く、口頭試問を含んだ面接や学科に関連した専門的知識を要する小論文が課されることも珍しくありません。



国公立大学の医学部医学科でも多くの大学で学校推薦型選抜が行われます。なかでも特徴的なのが、出身地域に制限を設ける「地元出身枠」や、卒業後の勤務地等に制限を設ける「地域枠」の学校推薦型選抜で、全50大学のうち約8割の大学で実施されています。地域によっては医師不足が深刻となっており、将来地元に残って活躍する医師の育成が地域の課題となっているからです。そのため、地域枠で合格・入学すると、卒業後に特定の地域で医師として働くことを条件に奨学金が受給できるといった例も少なくありません。

【学校推薦型・総合型選抜で面接必須化】

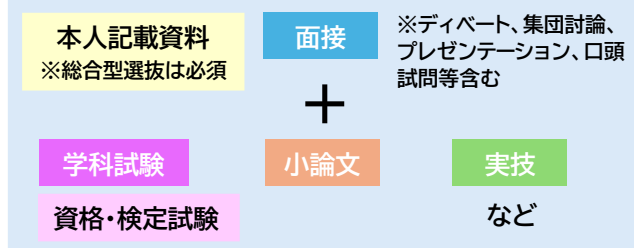
文部科学省は5月27日付で大学入試のルールブックともいえる「大学入学者選抜実施要項」を発表しました。既にメディア等でも報道されていますが、2027年度入試（2027年4月入学の学生対象）から、総合型選抜および公募制の学校推薦型選抜で面接を必須化することになりました。また、総合型選抜における本人記載資料の扱い

が「積極的に活用」から「必ず評価に活用」に変わりました。学校推薦型選抜では面接が必須となり、総合型選抜では面接に加えて受験生本人が記載する資料の評価が必須になります。

2027年度から

ルール

面接による評価を必ず実施(指定校など非公募型で専願の場合は面接は必須ではない)。
教科・科目に係る個別テストを課す選抜を実施する場合は、他の評価方法とバランスの取れた配分で判定に活用すること(2月1日より前に実施することは可能)。



※2026年度まで実施していた選抜区分で2027年度からの導入が難しい場合、2029年度までに面接を導入すること

面接必須化によって、受験生は志望校で何を学びたいか、志望動機をこれまで以上に明確にする必要があります。なぜその大学なのか、何を研究したいのか、他の大学と何が違うのか、を自分の言葉で伝える準備をしてください。大学側にとっては、面接を実施することで第1志望の受験生を集めやすくなる可能性があります。この度の発表は受験生にとって、進学先についてこれまで以上に真剣に考える機会になるでしょう。

【河合塾 Kei-Net より引用・抜粋】

本校では昨年度の国公立大学合格者総数は159名で、そのうち学校推薦型選抜での合格は8名、総合型選抜では22名でした。そのため国公立大学合格者のうち「約19%」の生徒が学校推薦型選抜・総合型選抜で合格を勝ち取ったという結果になりました。

近年では、入試制度改革により大学入試はますます多様化しています。正しく情報を集めて理解することは、受験勉強と同じくらい志望校の合格には欠かせないものです。もっと詳しく知りたいと思った人は、先日配布された「進路資料」をはじめとして、各大学のホームページや学級図書にある旺文社「蛭雪時代」、2階演習室の赤本や受験報告書等の資料を確認してみましょう。もし疑問や不安・迷いが生じたら遠慮無く進路指導室（2階職員室）に相談にきてください。進路指導部は担任と連携を取り、手厚くサポートしていきます。